古代ギリシア語

古川 晴風『ギリシア語四週間』
荒木 英世『エクスプレス 古典ギリシア語』
風間 喜代三『ラテン語とギリシア語』

井浦　伊知郎

古川晴風「ギリシア語四週間」（大学書林　1958年）

筆者が大学に入ってすぐに履修した初級ギリシア語の授業では、テクストに田中美知太郎・松平千秋「ギリシア語入門」（岩波書店）が採用されていた。言うまでもなく西洋古典語の碩学２名の手になる名著である。説明も簡潔、問題数も手頃で授業用にはすこぶるよくできた練習本だったが、唯一つ、訳読問題の解答例が全く付されていないのは初心者にとって悩みの種だった。また、高津春繁「ギリシア語文法」（岩波書店）が当時既に絶版となっていたため、ちょっとした文法事項の確認にも手頃な日本語の参考書が見当たらず、授業仲間共々苦労していた。そんな時に手にしたのが本書である。

「四週間」シリーズは１カ月程度の「独習独学」を前提として作られている。本書もその例に漏れず、まずアルファベットの読み方に一日分を費やし、一週目と二週目で基本となる動詞の活用、名詞・代名詞の曲用、三週目で法や関係詞や数詞、最終週では比較的まとまった古典作品の原文が訳読練習用に充てられ、一方で、全体にわたり文論や各種動詞活用への言及が周到にちりばめられている。各日の例と解説も、初回ではおそらく読みきれない程に懇切を極めるが、一通り済ませた後に読み返してなお有益とも言える。

語形変化は見やすい表形式で巻末にまとめられているし、無論全ての和訳・希訳問題には解答が用意されている。古典語を学ぶ過程で知りたいこと調べたいことは多いが、外国語の文法書にはまだ手を出しにくい、という初学者にも適当な自習用の参考書であろう。

荒木英世「エクスプレス　古典ギリシア語」（白水社　1995年）

白水社の「エクスプレス」といえば、既にシリーズ初期の1986年に荒木英世氏著「現代ギリシア語」が刊行されている。必要最小限の文法解説、覚えてすぐ役立つ様に配置された例文で、速くかつ気軽に会話の初歩をマスターすることに主眼を置くシリーズとして知られている。そのシリーズから同じ著者の手で、古典語中の古典語、その重厚かつ深遠な雰囲気が強調されることはあっても、「必要最小限」や「気軽」や「会話をマスター」といった言い回しなどおよそ似合わない（と思われがちな）古典ギリシア語の入門書が、遂に出た。しかも本文の朗読を吹き込んだテープ付きである。

体裁は、各課左1ページに例文、右1ページに語彙と日本語訳、見開き2ページ以内の簡潔な文法解説、数章おきの練習問題という「エクスプレス」シリーズの基本路線に忠実な構成。例文は、ヒッポクラテースの「人生短く芸術長し」に始まり、以下ソポクレースにアリストパネース、アイソーポスにエウリピデースなど。全て有名な原文からごく少しずつの引用だから、現代語学習と同じ感覚で無理なく音読し、手で書き、暗唱できる。

最後の4課には「オイディプース王」の最大の見せ場たる第4エペイソディオン、王と羊飼いのやりとりが収められ、語学の常道「役割練習」にはうってつけだろう。真似して会話を楽しむのも一興（ドイツのギムナジウムや大学では、今もそうしている様だが）。

オーソドックスな古典語学習に馴染んだ層には、ひょっとすると違和感があるかも知れないが、こういったアプローチも古典語学習の在り方を多様にし、初学者の選択の幅を広げるのではないだろうか。

風間喜代三「ラテン語とギリシア語」（三省堂　1998年）

副題に A Primary Guide to Latin and Greek とある通り、ギリシア語とラテン語の比較概論として書かれている。ギリシア語はすべてラテン・アルファベットに転写されており、しかも逐語訳が付されている（ほとんど原文の語順通りで理解できるようになっているのが面白い）ので、ギリシア語の初心者や未習者でも、西洋古典語や比較言語学に関心があれば読めるようになっている。初めの3章では両言語の系統や文字論、現代の印欧語（特に英語）への影響等が解

説されている。とりわけアルファベットの変遷と諸見解の紹介は、文法学習では簡単に流されがちな箇所で、しかも日本語でここまで詳しく書かれたもの自体が多くないから、いろいろ学んだ後でもあらためて読んでみると有益だろう。

作者は、形態論を大幅に省略せざるを得なかったと「あとがき」で述べているが、両言語の比較概論としては、決して見劣りするものでない。特にアスペクトの項では、ギリシア語「アナバシス」、ラテン語「ガリア戦記」からそれぞれ躍動的な場面を抜き出し、アオリストや完了・不完了の使い分けを一つ一つ挙げて説明を加えており（筆者はふとH・ヴァインリヒの『時制論』後半における『語り』の時制分析を想起したが）、初級の既習者が読めば、格や時制の体系をまとめ直すには格好の手引きとなろう。統語論の章では、主に前置詞の示す領域と従属文の構造が両言語間で比較されている。

ほかにも月名や固有名詞の由来など、あちこち拾い読みしても楽しめる話題が盛り込まれている。文献の紹介も、現時点では最も新しいものだろう。